**〔解　説〕**

明和八年（一七七一）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

**〔花渡しの段　あらすじ〕**

大和の妹山の太宰家後室定高と紀国の背山の大判事清澄は長年吉野川を挟んで反目しあっていましたが、定高の娘雛鳥と清澄の息子久我之助は恋仲です。久我之助が仕える天皇の寵愛を受ける鎌足の娘采女は宮中の混乱から逃れますが、采女を探す入鹿は両家に疑いをかけ、雛鳥を入内させ、久我之助を自分に仕えさせよと、無理難題を命じるのでした。

そして、互いを思いやる両家の思惑は川を挟んで行き違い、久我之助と雛鳥は若い命を散らすこととなります。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

**花渡しの段**

奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館。入鹿公のお成りとて、ざヽめき渡る奥女中。召しに応じて大判事清澄、袴のひだも角菱ある、不和なる仲の定高が屋敷。互ひにそれと白書院、目礼もせずつつと通り

「入鹿公の御座の間ヘ、誰そ案内仕れ」

と、云ひ捨てヽ行かんとす。定高声かけ

「先づ暫く、珍らしや大判事殿、太宰の少弐が跡目を預かる妾が屋敷。挨拶もなくお通りは女と思ひ侮つてか。たヾし武家の礼儀御存じなくば、ちつと御伝授申さうか」

と、詞の非太刀打掛捌き。騒がぬ清澄空嘯き

「少弐存生より領地の遺恨により、この屋敷の内へは今日まで足踏みもせぬ大判事。入鹿公のお召しによつて参つたは勅諚を重んずるゆゑ。皇居の間へ出仕の心。女童に用なければ、挨拶する口は持たぬ」

「イヤそれなればなほ以つて、今日入鹿様お成りなれば大内も同然。大判事に御疑ひのことあつて、この定高に吟味いたせとの勅諚。この詮議、済まぬうちは一寸も御前へは叶はぬ。お控へなされ清澄殿」

「ムヽハテ珍らしきことを聞く。君御詮議の筋あらば検非違使に仰せて、拷問あらんになんの御遠慮。もとより御疑ひ蒙るべき覚えなし。なまぬるき女の吟味受けるやうな清澄でおりない。御身見事詮議してみるか」

「オヽ太宰の後家この定高が、きつと詮議してみせう」

「イヤ小癪な。そこ退いてはや通せ」

「まかりならぬ」

と根に持つ遺恨、互ひに折れぬ老木の柳。松の間の襖押し開かせ

「出御なり」

と警蹕の声に、二人も飛び退り、恐れ入つたるばかりなり。入鹿の大臣寛然と上段の褥より遥かに見下し

「ヤア大判事。未明より参内せよと、勅使を立つるに甚だの遅参。アレ見よ今日は午の上刻。流星南に出でて北に拱くするは、万乗の位に即くまろが吉星。それほどのこと知らぬ大判事でなし。たヾし、入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を退かん下心か。緩怠なり」

ときめ付くれば

「コハ御諚とも覚えず、いま一天四海君の御手に属するとはいひながら、いまだ残党先帝に心を寄する族あつて帝都を窺ふ折から、われらが領地紀伊国は、西国南海の咽首にて大事の切所。弓を張り矢尻を磨くに隙なければ思はざる遅参。その上忠臣第一の大判事に、何事の御疑ひ」

と憚りなくぞ申しける

「ホヽその仔細といつぱ。先帝の思ひ者采女の局を、まろが后妃に定めんと行方を尋ね求めるところ、猿沢の池へ入水せし由。いかにしても合点行かず。察するところ采女が在処は、大判事そちがよく知ろうがな」

と思ひがけなき疑ひに、清澄不審の眉をしはめ

「コハ存じ寄らざる儀。その采女の御事は、猿沢の池に捨身ありしとは、誰れ知らぬ者ござなきにわれらが行方存ぜしなどとは、なにを目当ての御仰せなるぞや」

「ヤアとぼけな。汝が倅久我之助は采女が付人ならずや。その親たるそちなれば、よも知らぬとは云はれまじ。サア真直ぐに白状せよ。陳ずるにおいては計ふべき旨あり」

「イヤのう大判事殿お聞きありしか。妾に仰せ付けられし詮議とはこのこと。サア覚えがあらば申されよ」

と云はせも立てず

「イヤ黙り召され。女の差し出るところでなし」

「イヽヤ勅諚を受けての詮議なれば、勅答の有無によつて、その座はちつとも立たしはせじ」

と膝立直し詰め寄つて、双方挑み争ふたり。入鹿の大臣大口開き

「ハヽヽヽイヤ巧んだり拵へたり。定高が領分大和の妹山、清澄が領地紀の国背山。隣国境目の論により、互に確執せしとは表の見せかけ。内々には申し合はせ、故主の帝へ心を通はすおのれらと、わが眼力に違ひはせじ。さすれば天皇采女は両家の中に隠し置かんも知れざるゆゑ、大判事が詮議を申し付けた定高コリヤそちにもこの疑ひはかかるぞよ」

「これはまた君の勅諚とも覚えませぬ。夫少弐より仲悪しき大判事殿。何ゆゑ申し合はさうやうもなし。私にまでお疑ひは恐れながら」

「云ふな女め。さほど音信不通の仲なるに、大判事が倅久我之助。そちが娘雛鳥と、密通いたしをるはいかに。イヤ知るまじと思ふか、倅どもが縁につながれたる汝らなれば、両方共に吟味は逃れぬ。なんと肝にこたへうが」

と飽くまで邪智の一言に、何思ひけん大判事、席を蹴立てて行かんとす。すかさず定高が刀の鐺むんずと取り

「コレ待ち給へ清澄殿。気相変へてコリヤいづくへ」

「ヤアいづくへとは、親々が不和なる仲を存じながら、忍び逢ふ倅が不所存。引捕へて吟味せねば、子供が縁を幸ひに和睦せしと云はれてはわが家の恥辱となる」

「オヽそりやこの方も同じこと。一且は武士の意地。今更仲が直りたいばかりに娘にわざと不義させしと、世上の人に蔑せられては、過ぎ逝き給ふ夫へ立たぬ。妾も共に」

と裾引き上げ駈け出す二人を、はつたと睨め

「私の趣意に立ち騒ぐ尾籠やつ。汝らが倅の不義を吟味はせぬ。まろが尋ぬるは采女が在処。サア、いづれかなりと早く云え。なんと〳〵」

「イヤ倅が性根はいざ知らず。采女殿の儀はかつて存ぜず。わが詞に偽りあらば弓矢神の御罰を受けん」

と刀すらりと抜き放し、てう〳〵と金打し

「この上にも御疑ひあらば、いかほどの拷問なりとも、サア遊ばせ」

とどつかと坐す

「オヽ妾とても少弐が妻。家に換へて采女殿はかくまはぬ。水責め火責めに逢ふとても、知らぬことは存じませぬ」

と詞鋭どに云ひ放す

「ムヽしからば采女が詮議は追つて。先づ汝らが面晴れなれば、かくまはぬという潔白に、定高は雛烏を入内させよ。まつた大判事も覚えなきに相違なくば、久我之助は今日より、朕が目通りへ出勤させよ。きつとその旨心得よ」

と、何がな探る当座の難題。二人は胸にぎつくりと、答へも暫しなかりしが、ヤヽあつて詞を揃へ

「かくありがたき勅諚を」

「互ひの子供が違背いたさば」

「オヽ云ふにヤ及ぶ」

とあたりなる生け置く桜の一枝押つ取り

「得心すれば栄える花、背くにおいては忽ちに、まろが威勢の嵐にあて、マツこの通り」

と欄にはつしと打折り落花微塵。『はつ』とばかりに親々の心も共に散乱せり。なほもゆるまぬ大音声

「ヤア〳〵弥藤次はやく参れ。汝は百里照の目鏡を以つて香具山の絶頂よりきつと遠見を仕れ。コリヤ〳〵両人よつく聞け。もし少しでも容赦いたさば両家は没収、従類までも絶やするぞ。性根を定めはや行け」

と急き立つ上意に、親々の思ひは千々の胸の内。見せぬ面に忠と義を張り詰めし気のたゆみなく、打ち連れてこそ出でて行く。誠に秦の趙高が馬と欺く小牡鹿の入鹿が威勢ぞ類ひなき。

かかるところへ中門より追ひ〳〵駈け入る鎧武者

「御注進」

と呼ばはつて、御白州に頭を下げ

「河内の国に武智郡司安彦、先帝に味方をして大鳥の城に籠りしを、官軍残らず馳せ向ひ、敵を攻め付け一昼夜に落城。大和に安曇の文次宗秀、当麻の辺りに陣を取り、南都を攻むるその結構。馳せ向かふて戦ひしに、味方の官軍利を失ひ残らず敗北仕る」

と息つぎあへず言上すれば

「ハヽヽヽヽもの数ならぬ逆徒の奴ばら、朕馳せ向うて微塵にせんぞよ。かの穆王が龍馬に勝れし稀代の名馬、吉野の牧より狩り出したる、その馬引け」

と広庭へ引き出ださせ、欄よりひらりと打ち乗り、名馬の勇み。手綱かいくり、しと〳〵〳〵。轡の音はりん〳〵〳〵。綸言誰れか背くべき。大地狭しと馬上の勢ひ、刻む蹄も巷のこだま

「いそふれ、やつ」

と出陣の駒をはやめて

**〔解　説〕**

明和四年（一七六七）大坂竹本座初演。近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛の合作による全九段の世話物です。大坂堀江の相撲の人気力士、岩川と千田川がモデルと言われ、猪名川、鉄ヶ嶽二人の義侠心、猪名川と妻おとわの夫婦愛が描かれた二段目の「猪名川内」「相撲場」が特に有名です。「夏祭浪花鑑」、「双蝶々曲輪日記」と並んで、大坂の人々の心の機微を描いた市井物の代表作となっています。

**〔二段目　あらすじ〕**

人気力士猪名川は、恩ある商家鶴屋の若旦那礼三郎と恋仲の傾城錦木の身請金二百両の調達に苦慮しています。一方、その錦木に横恋慕する一原九平太は贔屓とする力士鉄ヶ嶽を使って錦木を身請けしようとするのですが、猪名川は思い止まるよう鉄ヶ嶽に頼みます。今日の取り組みが猪名川と鉄ヶ嶽であることがわかると、鉄ヶ嶽は「魚心あれば水心」と相撲の勝ちを譲るようにほのめかします。苦渋の選択を迫られる猪名川は、義理の為にはと涙をのんで勝ちを譲る覚悟をします。その時贔屓から二百両が届けられたと聞き、猪名川は一気に鉄ヶ嶽を倒すのでした。しかし、その金は妻おとわが苦界に身を沈めて得た二百両だったのです。

**猪名川内の段**

　芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞台、堀江〳〵と国々へ、鳴り響きたる猪名川が、角力の中は夫婦連れ、こゝに堀江の仮住居、店は初日の飾り物、半紙毛氈煙草盆、羽織脇差、酒は米俵、余所の軒端をも賑々しくぞ見えにける。町中の贔屓に肩も猪名川が、鉄ヶ嶽陀多右衛門と、打ち連れ帰る我が家の内

「ヲヽこちの人戻らしゃんしたか。陀多右衛門様、ようお出で。初日からまだお目にかゝりませぬが、きつい大入で、お目出たうござります」

「アイ、そりゃもふ互ひでごんす。見物の足が早さに、そろ〳〵行かうと出かけた道で、猪名川に逢ふたによって、それでちょっと寄りました」

「それはマア〳〵ようこそお出で。したがまだ漸うと今の先、櫓太鼓を打ち出しました。マアゆるりとお茶なりとも」

と、会釈に汲み出すより、心の花香ぞ愛想あり

「コリャ女房ども、留守の内へ今日の相撲割は来なんだか」

「イヱ〳〵まだ何にも持っては」

「ハテ埒の明かぬ。今まで知れぬは、何ぞもめでもあったかい。のう陀多右衛門」

「サイヤイ、俺も初日に鈍な相撲を取ったによって、何でも今日はと思ふてゐるが、誰と合はすぞ。相手によっては魂胆も、工夫もして見にゃならぬ。いっそ聞きにやらうかい」

「ハテマアよござんす。その内には持って来う。幸ひ貰ふた肴もあり、主と一緒に上がって行かしゃんせ。ドレ、拵えう」

とかけまく神にあらねども、菩薩廻りの女房は、勝手へ立って入りにけり

「猪名川様、お宿にござりますか。新町の大坂屋から参りました。左右衛門申します。『錦木太夫が身請けの後金、今日中に遣はされませぬと、こちらに身請けの客衆がござります故、その方へ相談致します。が、お前のお顔を立てまして、今日中は待ちます。明日になったらこちらへ太夫をやります程に、その時いぢむぢのない様に、念を入れい』と申されました」

と云ひ捨て使ひは立ち帰れば

「ヤアその身請け、外へさして猪名川が立つものか」

と駆け出すを

「コリャ待て〳〵、猪名川。その身請けの訳もその客も、この鉄ヶ嶽がよう知ってゐる程に、マア行かずともよいわいやい」

「ムヽ、スリャその身請けの相談を、われがよう知ってゐるか。シテその身請けの客といふは」

「イヤ、外でもない、俺じゃ。ヲヽ、この鉄ヶ嶽陀多右衛門じゃ程に、マアそう思ふて貰はうかい」

「ムヽ聞こえた。コリャ九平太が腰じゃな。尤もわれがためには大事にかけにゃならぬ人じゃ。が、こゝをよう聞いてたも。アノ錦木太夫は、俺が親方礼三郎殿とは、モきつう深い仲じゃ。その錦木故勘当まで請けられたこと、コリャモウ云はいでも我が身よう知ってゐやることじゃ。そこらはまあ取ってほって。五百両といふ金まで渡し、後金の二百両、才覚するその内に、太夫殿を外の手へ渡しては、どうも俺が顔が立たぬ。我が身が中へ這入ったこそ幸ひ、どうぞそっちの身請けを、じゃみさす様に云ひ廻してたもるまいか。ヤコレ鉄ヶ嶽、頼む〳〵」

「ヲヽ、この身請けはどうせふとかうせふと俺がじゃ。われが頼む様にしてやろ、と云ふたら勝手はよからうが、マア嫌じゃ。わりゃ恵海庵で九平太様をひどい目に合はしたげな。ヲヽ強いこっちゃ〳〵。その仕返しを頼まれてゐるこの鉄ヶ嶽。あんだらくさい事云ふない」

「ムヽ、すりゃその時の事が根葉になって、それ故身請けの邪魔するのか」

「邪魔するとは何のこっちゃ〳〵。錦木が身請けは金づくじゃぞよ。僅か二百両ばかりの金、団子の咽に詰まった様に、ぎっちかは〳〵と、吠え面かわくとは違ふて、七百両といふ金を、がらりと出して身請けするのじゃ」

「成程尤も。モ兎角銘々親方を、大事に思ふから起こる事じゃ。が、何とかうしてたもらぬか。どうぞ俺を九平太様に連れて行て、あなたの胸の晴るゝ様に、ぶたしなりと、又踏ましなりとさして、身請けはこっちへさしてたも。モ我が身の云やる通り、金づくの事なれば、今日中に後金さへ出来れば、頼む事も何もなけれど、サちっと急には出来にくい。尤も在所へ云ふてやったら、工面の出来る事もあらう。が、親どもの耳へは入れとむない。それで我が身を頼むのじゃ。又折角身請け仕やってからが、とても太夫が九平太様の女房にゃならぬ。スリャコレが費えといふものじゃ」

「黙れ〳〵黙りやがれ。太夫が従はうが従ふまいが、それにゃ構はぬ。九平太様にゃ金がたんとある。サ小判がたんとあるによって、その金でわいらが頬を、張って〳〵張り廻すのじゃ」

「サイノ、金で頬を張らずとも、この猪名川をどうなりと腹の居る様にして、どうぞ身請けをさしてたも。一生の頼みじゃ。恩にも着よ。コレ、手を下げる、鉄ヶ嶽」

「ムヽ、そんなら何か、踏まれてもぶたれても、わりゃ云ひ分はないと云ふのか」

「イヤモウ、聞き分けてさへたもれば、譬へこの身はどうなっても」

「ハヽヽコリャ相談が面白いわいハヽヽ。九平太様の名代に、マちょっとかうせふかい。何じゃい〳〵〳〵、何をびこ〳〵さらすのじゃ。コリャわりゃたった今、云ひ分はないと云ふたぞよ。但し、云ひ分があるかいやい」

「イヤサ、何の云ひ分があるもので」

「あるまい〳〵、何のあらうぞい。恵海庵での意趣返し。わりゃ九平太様をかう喰らはしたか。ヤ、かう踏んだか。かう〳〵〳〵」

と、弱みを付け込む厄病の、髪も頭も引きしゃなぐり、苛む折から表へ息急き

「ハイ、今日の相撲割でござります。もう追っ付け土俵入りじゃ程に、早うお出でなされませ」

と書付ほり込み立ち帰れば、陀多右衛門押し開き

「何じゃ、鉄ヶ嶽に猪名川」

「ムヽ、スリャ今日の相撲は」

「コリャ見い。俺とわれとが相撲じゃといやい」

「ムヽ時も時」

「折も折」

「我が身と俺が立合ひとは、ハテ気味合ひな事じゃの」

「コリャ、われも池田の猪名川と云はれては、国々へ名の通った者。俺も又、大名のお抱へ。殊に大坂は初めてなれば、この相撲しくじるが最後、扶持放れじゃ。スリャコレ、二人ながら大事の相撲。九平太様の名代に、恵海庵の仕返ししたれば、この算用は済んである。ガ又、錦木が身請けの事は、俺次第じゃ。ヲヽ、この鉄ヶ嶽が心次第じゃ程に、魚心あれば水心。ナ、猪名川、土俵で逢はう」

と、強い詞のどこやらに、味な鉄棒引きずる雪駄、ぐはら付かせてぞ

「コリャ猪名川、今云ふた魚心あれば水心、必ず忘れてくれなよ。ハヽヽヽヽ」

出て行く。後に猪名川諸手を組み、思案にくれて居たりしが

「段々日切りの切れた後金。親方が催促するも、九平太が皆。兎角鉄ヶ嶽を抱き込んで、あっちの身請けを廻して貰ふより外はない。と云ふても、一筋縄では行かぬ奴。抱き込む仕様は。ムヽ、太夫が身請けは俺次第。魚心あれば水心あり。ムヽ、こりゃ今日の相撲を、振ってやらざなるまいわいの。ソレ〳〵、あれと俺とが立ち合ふこそ幸ひ。美しう振ってやり、あいつに勝を譲っておいて、その上でのっ引きさせず、頼むが近道上分別。とは云へ名取の鉄ヶ嶽、どう魂胆してなりとも、投げねばならぬ晴れの相撲。云はば一生懸命の、大事の相撲を金故に、振ってやる猪名川が、心の内のせつなさ汚さ。摩利支天にも見放され、相撲冥加に尽きたか」

と、思はず拳を握り詰め、身を震はして男泣き。始終立ち聞く女房が、涙隠して

「ヲヽ、こちの人とした事が、さっきにから飯拵えて待ってゐるのに、こゝで上がるか。奥へ据えうか」

「イヤモ、飯なら喰ひたうない。ヤ、ホンニ相撲から呼びに来た。ドレ、行て来う」

「コレ、待たしゃんせ。ソレ、髪がきつう乱けてあるぞへ。人中へ見苦しい。結ふて上げう」

「イヤ〳〵、結ふてゐたら隙が入る。つい撫で付けておいてたも」

と、に直れば女房も、押しては云はぬもつれ髪、鬢のほつれを撫で付ける、櫛のよりの胸、映して見たき鏡立て、映せば映る顔と顔

「申し、猪名川殿。色も青ざめ、そしてまあ、目の中も潤んで、どうやら気色の悪さうな顔付き。もう今日の相撲へは、断り云ふて行て下さんすな」

「何をあんだら尽くすぞい。いつはともあれ今日の相撲、鉄ヶ嶽とこの猪名川、初日の出ぬ先から町中が、待ってゐる晴れの出合ひ。何でも鉄ヶ嶽を、土俵の砂へ埋まにゃおかぬ」

「イヤ、そりゃ嘘じゃ。今日の相撲は鉄ヶ嶽に、振ってやるお前の心」

「こりゃ声が高い。スリャさっきにからの様子残らず」

「アイ、一間で聞いてをりました。僅かな金に手詰まって、難儀さしゃんすがわしゃ悲しい〳〵わいな、いっそこの訳親父様に」

「たはけめが。それ云ふ程ならばこの様に、人に叩かれ踏まれはせぬわい。昔気質の親父様、打ち明けて物云ふと、礼三様に異見の何のとやかましい。若いお人の水の出端。もし命生害になった時は、ナコリャ、千日に苅った萱じゃわい。アヽ急な事でさへなくば、工面の仕様もあらうのに、僅か二百両の金故に、大事の相撲を振ってやらざなるまいと思へば、不甲斐ないやら口惜しいやらで、おりゃ胸が裂ける様なわやい〳〵」

「ヲヽ、道理でござんす、尤もでござんすわいな。モウ、相撲取りを男に持ち、江戸長崎国々へ、行かしゃんすりゃその後の、留守は猶更女気の、独りくよ〳〵物案じ。夫に怪我のない様にと、祈る神様仏様、妙見様へ精進も、戻らしゃんして顔見るまで、案じて夜を寝ぬ女房の、今この切なる苦しみを、連れ添ふ私に云はしゃんせぬ。お前はそれ程つれない」

と、女夫になった今までを、数へ立て数へ立て、恨み涙に時移る、早追ひ〳〵の呼び使ひ

「申し〳〵、土俵入りでござります。早うお出でなされませ。ちゃっと〳〵」

に是非なくも

「女房ども、行てくるぞや」

「ヱヽ、そんならどうでも行かしゃんすか」

「ホ、鉄ヶ嶽を抱き込んで、工面通り行きゃ格別」

「もしも行かねば」

「絶体絶命」

「ヱヽ」

「こりゃ。これが暇乞ひにならうも知れぬ。さらば」

とばかり一声を、後に残して出て行く

「ノウコレ待って下さんせ。たった一言云ひたい事。猪名川殿〳〵」

と見れども後は雲霞

「夫の命に関はる大事。コリャかうしてはゐられぬ」

と、帯引き締めて夫の後、慕ふてこそは

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承下さい。